特集

1　花きの省力化技術で生産コスト削減

はじめに

花きの消費が低迷している。1997年までは右肩上がりの活況を呈していたが、以降は減少に転じている。花きの消費を回復し、生産の振興を図るためには、従来の結婚式やギフト主体の高級花き生産から、家庭需要を対象とした生産に転換しなければならない。

花き産業振興方針（農水省農産園芸局、2000）では、花を購入したことがない世帯は6割もあり、そのような人は「新鮮で、長持ちする花を、お手ごろ価格で、安心」して購入できることをのぞんでいる。

そこで、当センターでは、「もっと家庭に花を！」を目標に、消費者の意向に添えるような生産技術開発に取り組んでいる。

消費者の要望にそった研究課題

「新鮮」には、バケット低温流通技術の開発、「長持ち」には、品質保持剤処理技術の開発、「安心」には、食品の賞味期限にならった日持ち保証システムの確立について研究を実施している。

一方、「お手ごろ価格」で消費者に供給するためには、一層の収量増と生産コストの縮減を図らねばならない。そこで、生産コスト縮減の一手段として、省力化・労力軽減技術の開発に取り組んでいる。

省力化技術の具体的な取り組み

省力品種としては、無側枝ギクを導入し、キクのわき芽かきの労力を軽減した。シンテッポウユリでは神戸市淡河町で野菜の移植機を用い、移植の実用化を始めている。花壇苗生産では土詰め機による労力の軽減を進めている。カーネーションでは養液土耕の導入で、施肥かん水労力が従来の1／30に軽減できた。このような省力化を図ることで、生産コストが下がり、お手ごろ価格での供給が可能になるとともに、輸入花きとの競争が可能になり、生産振興に寄与できた。

宇田　明（農業技セ・園芸部）

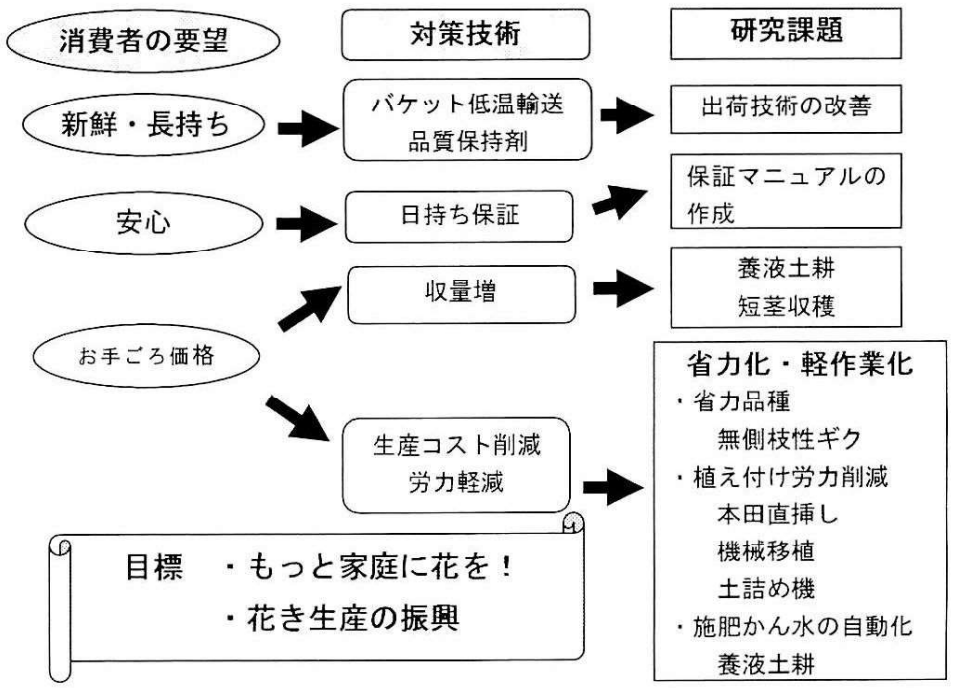

図　花き産業の目標と兵庫県立農林水産技術総合センターでの研究課題